

患者が変われば医療が変わる 医療が変われば地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第56回 がんサロンの向かう先

島根県がん対策推進室から郵便物が届き、7種目の「審議会等委員の公募」の案内を見つけた。その中に「特別支援教育

認知症や精神疾患も学び活かす

これまで行ってきた軌跡を辿ると、2005年12月、地元益田市で全国初のがんサロンを開設し、島根県下は勿論、全国展開の礎を作った。2007年、出雲市で第1回「がんサロン交流会」を開催し、全国から800名を動員。その後、がん治療学会をはじめスピリチュアル学会、死の臨床研究会、日本ホスピス緩和ケア研究会など沢山の学会、研究会に参加して研さんを積んだ。

一方島根県では、島根県がん対策推進協議会委員、島根県総合教育審議会委員、島根県男女共同参画協議会委員を歴任。その間、近隣の小・中学校、高校、大学で「がん教育」「価値観教育」「創造性教育」を中心に講義を行った。

16年まで6回「がんサロン支援塾」を益田市で開催し、がんサロンの開設・運営に付いて「12位1体」のノウハウを伝授。その支援塾には全国から医療者、研究者を中心にがん患者を含め250名が参加した。数年前から認知症や精神疾患対象のユマニチュードやオープンダイアログを学び、それらを実践する施設も訪問している。

私自身ががん患者であり、身体障害者なので、がんサロン内で2つの技法を使ってみたが、心の痛みをケアするのは「どの病気の患者も同じ」な

のを実感。そのためがんサロンと認知症患者、精神疾患のある方と合流した会の開催を考えている。数年前、国際医療福祉大学大熊由紀子先生と出会い、毎年開催される「えにしの家」に参加するようになって、多くの福祉関係の当事者と出会い学んだ。そして「すべての家」のことも知った。

がんサロンを開設してから15年。街造りから在宅医療の推進までいろんな事業に関わりながら入りの役に立つことが出来れば、自分の「生きる力」になると考え行動している。そして人生は「他力」から成り立っているのを実感している。